

朝日新聞 発行年月日：2017.09.24 付

見出し：「バナナ定期便」愛届け 60 年

「バナナ定期便」愛届け60年

バナナを60年近く、福祉施設に寄付し続けている青果仲卸会社が、京都にある。育ち盛りの子どもたち、幼い頃はめったに食べられなかったというお年寄りたちが、「バナナ定期便」を楽しみにしている。

福祉施設の子らへ

京都の青果仲卸

9月中旬、京都市内で16回目の「受納式」があった。フィリピン産バナナ236箱が、市内212の施設に引き渡された。

「朱常分店」（京都市下京区）が定期便を始めたのは1959年。輸入自由化の1963年より前、バナナは甘くて栄養があつて人氣だったが、高価で手が届きにくかった。施設の子どもたちに食べてほしくて、初代社長の故・内田松一さんが夏と冬の年2回、贈るようになった。

子どもたちに「バナナおじさん」と親しまれた松一さんは99年に死去。その後、2代目社長の三男・吉治さんが15年以上続けた。2年前、吉治さんが79歳で死去した際は、「いつもバナナをありがとう」などの感謝の手紙が葬儀に届いた。現在は3代目の西廻直



①バナナを施設の職員に手渡す朱常分店の西廻直社長（左）
②2年前、2代目社長の内田吉治さんが死去した際は「今までありがとうとございました」「安らかにねむりください」の言葉が
いった陶板が施設から寄せられた。いずれも京都市下京区

行さん(53)が引き継ぐ。京都市と相談し、高齢者や障害者の施設にも広げた。

児童福祉施設「平安徳義会乳児院」施設長の吉田龍生さん(58)は「ヨーグルトやチョコレートと合わせたりと、子どもたちは楽しみにしています」と笑顔をみせる。知的障害がある女性の支援所「なづな学園」に通う女性(42)は、10代の頃から楽しみにしてきた。この夏は自宅に持ち帰り、バナナシナモントーストに。施設ではそれぞれメッセージやイラストを書き、感謝の気持ちを伝えている。

定期便は、会社が赤字になった年も途切れなかった。主な産地のフィリピンが災害に見舞われて品薄となり、寄付に必要な量を確保するのに苦労したこともある。西廻さんは「私たちのバナナを楽しみに待っていてくれる人たちがいる。温かいお礼の言葉を励みにしながら、会社がある限り贈り続けます」。(佐藤秀男)

「朝日新聞社に無断で転載することを禁じる」

承諾番号「17-5978」